

佳作

心の中にある外国人へのかんちがい

福岡県 福岡県立小倉南高等学校一年 宮嶋翔

私は、今年の三月に、高校入試合格を祝って京都府に旅行に行った。新幹線で京都駅まで向かい、昼食を食べる。とても大きく複雑な京都駅内に圧倒されながら、バスに乗り、ホテルに向かう。日本の一大観光地の一つである京都府。特にインバウンドからの人気はすさまじく、駅周辺は、むしろ日本人より外国人観光客の方が多く感じた。私は、外国人が多いだろうということは、あたりまえに心得ているつもりでいた。しかし、実際に駅に行くと、多くの外国人がいる様子を見ると、日本人特有の外国に対する偏見が、少なからず心の内にあつた。

ホテルに向かうバスにも、勿論多くの外国人が乗車していた。各々、ホテルや観光地に向かっていているのだろう。楽しそうにしていた。私が泊まるホテルは、駅からそんなに離れていない。私は、今日何をしようか、何を買おうかなど、ぼんやり考えをめぐらせていた。そして、バス内の前方に目をやった。

私より通路をはさんで一、二席前に、中国人と思しき男性が座っていた。スマートフォンをながめている。そ

のバスは、当然とても混んでいて、多くの人が立っていた。車内は、とても静かだった。

バス停に近づいていた。私は、降りるのはその次だとぼんやり考えた。そのとき、前方の中国人男性が、スマートフォンをしまい、降りるそぶりを見せていた。男性はくるりと後をふりかえる。そこには、六十代くらいの日本人男性が、手すりをにぎって立っていた。すると、それに気づいた中国人男性は、すぐさま席を立ち、スマートフォンで何かを開いて日本人男性に見せた。私は、その行動の意味が、すぐには理解できなかった。だが、中国人男性がスマートフォンに表示した物がこの周辺の地図だと分かったとき、合点がいった。中国人男性は、席をゆずっていたのだ。手で席を指して、頭を下げている。中国人男性は、スマートフォンの地図で、自分が次でバスを下車することを表していたのだろう。おじいさんは、

「いい、いい。すぐ降りるから。」

と言っていたが、かまわず中国人男性は手すりをにぎり、手で席を指しながら頭を下げていた。おじいさんは、礼を言い、その席に座った。

私は、その様子を見ておどろき、同時に心の中が温かくなった。そして、「外国人だから」と、偏見の目を向けていた自分を、深く悔やんだ。

中国人男性は、次の停留所で下車し、おじいさんと私は、その次の停留所で下車した。外国人は、日本のルー

ルを守らないと、よく聞く。私の住んでいるところでも、外国人が、歩道で自転車の並走をしているのをたまに見かける。しかし、そういう人が一部で、皆、心やさしい人たちののだと強く感じた。思いかえしてみると、バスの車内にあれほど外国人がいたのに、とても静かだったのではないか。「外国人」が日本のルール、マナーを守れないのではないのだと強く感じた。日本人も、ルールやマナーを守らない人はいる。国が違うだけで、同じ人間なのだ。

京都の旅は、とても楽しいものになった。清水寺にも、銀閣寺にも、京都タワーにも、外国人はとてもたくさんいた。どこに目をやっても、である。しかし、迷惑行為は一つもなかった。とても快適な旅だった。

私は、普段、外国人に対して差別や偏見の気持ちが少ないながらある。家族や友人との会話の中にも、その気持ちからの言動がかくれている。しかし、今、外国人はいたるところにいる。コンビニエンスストアのレジに、同じマンションの住民に、観光地に。インバウンドが増加し、外国人との関わりは、今後ますます増えていく。そんな中、決めつけるのではなく、日本人は外国人のことをよく理解し、外国人は日本のルール、マナーを理解することが大切だと感じた。

私は、今回の旅行で、様々なことを考えさせられた。自分自身、どのような形で外国人と関わるか分からない。もしかすると、将来、外国に行くことがあるかもしれない。

い。そのときに、その国のルール、マナーをよく調べ、理解し、守ることをしなければ、自分自身だけでなく、日本のイメージダウンにつながると私は考える。

私は、これからも外国人とのよりよい関わり方について、考えていこうと思った。